

2007 年 3 月修了

新領域創成科学研究科 国際協力学専攻

なぜザンビアは資源に依存してきたのか？ 資源依存の構造的因果関係

石曾根 道子（学籍番号：47 - 46886）

指導教員：佐藤仁 助教授

キーワード：ザンビア、銅、資源依存、経済停滞、構造的因果関係

背景と対象

国に豊富な天然資源が賦存することは何を意味するのか。天然資源に恵まれている国は、社会経済を発展させるための潜在的ポテンシャルをもつ（Ascher 1999）。しかしながら、豊富な資源をもつ途上国の過去 30 年の歴史を振り返ると、天然資源は必ずしも国の発展に寄与してきたわけではなかった。サックスとワーナーは、むしろ依存できるほど資源に恵まれた国は低成長に陥る傾向にあると指摘している（Sachs and Warner 1995）。特にサブサハラ・アフリカ諸国では、それが顕著に見られる。

資源依存と低成長の関係については、「資源の呪い説（Resource Curse）」をはじめ、さまざまな理論が提唱されてきた。しかし、それらは資源依存国で生じている一般的な傾向を示すものが多く、一国のなかで起こっている現象の連鎖を構造的に捉えたものは少ないといえよう。したがって、本研究は資源富裕国で一般的に生じている事象を考察するのではなく、ザンビアを事例に取り上げることにした。

そこで、既存研究をもとに、ザンビア経済が停滞している要因を調べたところ、ザンビアが低成長に至っている要因は銅への極端な依存であることが判明した。資源に依存することが低成長をもたらすのだとすれば、次に問うべきところは、その国が資源に依存する要因ではないだろうかと思案した。

目的と意義

本研究は、植民地期以来、銅資源に依存してきたザンビアを事例に、資源依存の構造的な因果関係を考察した。具体的には、銅資源を中心に、ザンビアがおかれてきた社会的環境、歴史的背景、地理的条件などにも着目しながら、ザンビアが銅に依存してきた要因について論究した。

貧困問題が著しいアフリカにおいては、援助だけではなく、アフリカに存在する資源を活かしながら持続的な発展を考える必要があるだろう。したがって、アフリカ諸国の発展を考えていく意味においても、アフリカにおける資源への依存問題を扱うことは重要だと考えた。

研究方法

本研究は、主にザンビアの鉱業法など文献調査による。文献を通して、植民地時代から現在に至るまで、ザンビアの銅事情を調査した。ザンビアの歴史的背景や南部アフリカの潮流にも着目し、資源依存の構造的な因果関係をまとめた。

結論

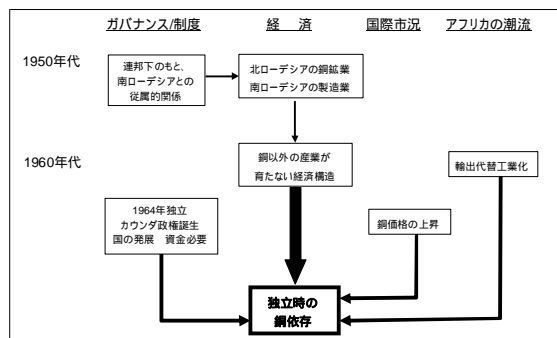
ザンビアが銅に依存してきた要因を解明するにあたって、以下に示すように時代を 2 つに区分して考察した。

（1）1964 年の独立直後の依存

ザンビアの銅依存は植民地時代にさかのぼる。銅産業を中心とした経済構造は、植民地時代に、南ロー

デシアの白人入植者や外資系産銅会社といった「よそ者」によって作られてきた。植民地支配の下、ザンビアの鉱業権および銅の収益は「よそ者」によって管理されていた（図1参照）。

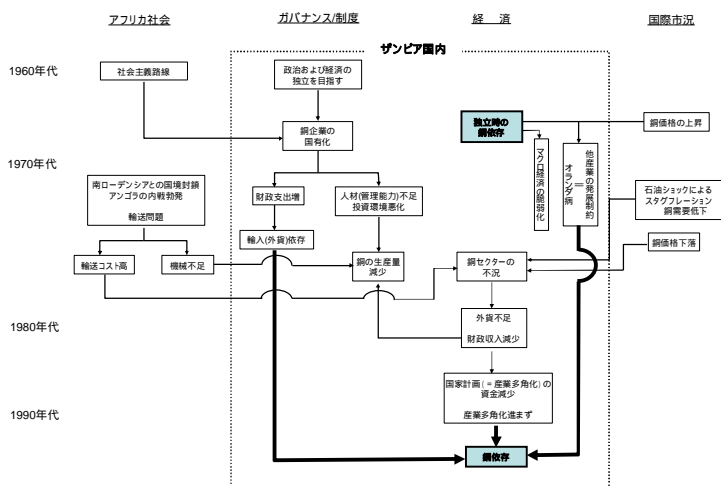
図1 独立直後、銅依存に至った因果関係



(2) 1970年代から現在までの依存

独立後、ザンビアは、これまで搾取されていた銅の利益をザンビア人のもとに取り戻すため、銅企業のザンビア化、つまり国有化を行った。すなわち、外資系企業の手中にあったザンビア経済を奪還し、経済的な独立を目論んだ。ところが、国有化はザンビア経済を豊かにするどころか、ザンビアの銅依存体質を後押しするものとなり、結局ザンビア経済を苦しめる結果となった。財政難に苦しむザンビア政府にとって、産業の多角化を掲げようともそれを実行する術はなく、現在に至るまで銅依存からの脱却を果たせずにいる（図2参照）。

図2 1970年以降、銅依存に至った因果関係



つまり、経済的な独立を目指して行った国有化が、不幸にもザンビアの経済を脆弱にするというパラドックスが生じたといえる。

今後の課題

以上の結果を踏まえ、今後の検討課題を次に示す。第1に、個人レベルにおける資源の便益や負担の分配構造についてである。本研究は国レベルの経済危機を中心に論じ、民衆の貧困問題には触れていない。人々の暮らしの向上を伴ったうえで国の経済発展を目指すには、鉱物資源の便益（雇用の機会など）や負担（環境破壊など）が、人々にどのように分配されているのかについても目を向けなければならない。

第2に、ザンビアと「呪い」を回避した国との資源依存構造を比較することである。ザンビアでは、政府による産銅会社の国有化が銅依存をさらに助長した。だが、この現象が全ての資源依存国に当てはまるわけではない。ザンビアと他国との資源依存の構造を比較することによって、「呪い」を回避する政策を見出せるのではないか。

第3に、天然資源は収奪の対象だけでなく、協調の動機付けにもなったのではないだろうか。内陸国であり、銅からの輸出収入に依存しているザンビアにとって、銅を港まで運び出す輸送ルートの確保は必至であった。ザンビアは、これらの輸送問題による被害を最小限に抑えるために、隣国との協調を余儀なくされたのではないか。

参考文献

- 高橋基樹、2000、「経済情勢」『南部アフリカ援助研究会報告書 第4巻 ザンビア・本編』、国際協力事業団。
- Ascher, W. 1999. *Why governments waste natural resources: Policy failures in developing countries*. The Johns Hopkins University Press. (佐藤仁記、2006、『発展途上国の資源政治学』、東京大学出版会)
- Sachs, Jeffrey D. and Warner, Andrew M. 1995. "Natural Resource Abundance and Economic Growth." *National Bureau of Economic Research*. Working Paper. No. 5398.